

特別陳列「畠田和一貝類コレクション展 10 畠田和一が採集していた絶滅危惧種 6」

2024 年 4 月 13 日（土）～2024 年 9 月 23 日（月・祝）

岡山県版レッドデータブック 2020 に掲載された陸産種

展示する種（10 種）：イトウムシオイ，クリイロキセルモドキ，ヤセキセルモドキ，オカヤマコギセル，オカヤマシタラ，シタラ科の一種（白色未詳種），トサマイマイ近似種，アワジオトメマイマイ，コウロマイマイ，ヒメコウロマイマイ

岡山県南部では，古墳時代から江戸時代初期までに天然林の大半が伐採され，それに伴って本来の陸産貝類相も甚だしく損なわれた。畠田和一がコレクションを築き上げた 1950 年代ごろにはかろうじて残っていた場所も，戦後の急速かつ大規模な都市化によって縮小または変質したため，現在は一見すると豊かな森林に見える場所でも，わずかな種しか確認できないことが多い。しかもそれらの種の大半は西日本の広域に分布する普通種であり（例，ヤマタニシ，ヤマクルマ，ヤマナメクジ，セトウチマイマイ），したがって岡山県という土地の固有性は失われ，一様化・凡庸化ばかりが際立っている。これら以外の稀少種が見られるのは神社仏閣の社叢など，特別な事情によって伐採・消失の難を辛うじて逃れた，狭い範囲に局限される。

一方，県の北部（山間部）は南部ほど大規模な伐採を経ていないため，近年も稀少性の高い種が確認されているが，広葉樹が優占する自然林は道路工事，植林，ダム建設などの影響で縮小傾向にあり，陸産貝類相は決して安泰でない。

今回展示した種は全国でもわずかしかな産地が残存していない種や，岡山県とその周辺の狭い範囲に分布域が限られる固有種，または棲息環境が特殊で著しく狭いなどの理由で絶滅が危惧され，レッドデータブックに掲載されたものである。

（岡山大学 福田宏）

イトウムシオイ

Chamalycaeus itonis Kuroda, 1943

(腹足綱：正腹足亜綱：新生腹足下綱：ヤマタニシ目：ヤマタニシ上科：ヤマタニシ科)

岡山県：絶滅危惧Ⅰ類

環境省：絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

展示標本：#2988 備中上市村〔現・新見市上市〕

山間部の石灰岩地帯にある森林内の岸壁下や斜面のガレ場において、落葉下や礫間に見られる。タイプ産地は「岡山縣阿哲郡上市村」(現・新見市上市)。記載後に中国・四国北部の数箇所から産出が報告されたが、兵庫県淡路島、愛媛県高縄半島、岡山県北部、広島県帝釈峡、同県久井の岩海などに分布が限定される。原記載(黒田, 1943)において既に「採集は頗る困難で、標本の個体数も甚だ多くない」、「相當な長時間と努力〔中略〕」にも拘らず僅か十數個を得られたに過ぎなかつた」、「産地が極めて局限されて居る」と記され、著しく稀産な種として知られる。

タイプ産地の新見市上市附近では 1988 年にも確認され、また同市豊永赤馬の日岬坂鍾乳穴、高梁市川上町高山市の穴門山神社でも見出されたが、それらの産地での現状は不明である。近年は新見市馬塚などでも棲息が認められた。

本種はもともと限られた範囲に低密度で出現する上に、森林伐採や石灰岩採掘などによる棲息地の縮小によって減少傾向にある。しかもその稀少性が特異な形態と相まって貝殻コレクターの興味を強く惹くため、標本販売業者やマニアによる乱獲対象となりやすい。



クリイロキセルモドキ

Mirus andersonianus (Möllerndorff, 1885)

(腹足綱：正腹足亜綱：異鰓下綱：真有肺大目：マイマイ目：サナギガイ
上科：キセルモドキ科)

岡山県：絶滅危惧 II 類

環境省：準絶滅危惧 (NT)

展示標本：#5413 眞庭郡川上
村郷原〔現・眞庭市蒜山西茅
部〕

別名エチゴキセルモドキ。
比較的寒冷な地方に産する種
で、タイプ産地は北海道三笠
市幌内大沼附近であり、本州
では日本海側の降雪量が多い
地域に分布し、緯度が下がる
にしたがって標高が高く夏も
比較的冷涼な場所に限られる
ようになる。特に西日本では、
山間部のブナ林にほぼ特異的
と言ってよい。樹上性で、夏季
にはブナの樹幹に高く登って
いる様子が観察される。

岡山県では畠田 (1951) が
記録したのが最初で、その証
拠標本はここに展示した眞庭
市蒜山西茅部産 1 個体であり
「黒田〔徳米〕氏同定品
1950. 8. 17.」とラベルにある。
近年も眞庭・美作両市と勝田
郡奈義町それぞれの北部（鳥
取県との県境に近い地域）に
おいて、ブナ林とその周辺で
のみ棲息が確認されている
が、産地・個体数ともに少な
く、出現範囲も狭い。ブナ林の
包括的な保全が本種の個体群
維持にとって必須と考えられ
る。また今後は、温暖化に伴う
夏季の過剰な気温上昇と乾燥
の影響が懸念される。



ヤセキセルモドキ

Mirus gracilispira Kajiyama & Habe in Habe, 1961

(腹足綱：正腹足亜綱：異鰓下綱：真有肺大目：マイマイ目：サナギガイ上科：キセルモドキ科)

岡山県：絶滅危惧 II 類

環境省：絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

展示標本：#6374 川上郡〔現・高梁市〕成羽町羽山 棲竜洞 (1959. 4. 9.)

タイプ産地は「岡山県〔現・高梁市〕成羽町空棲竜洞石灰岩地」。従来、分布は局限されると考えられていたが、最近の分子系統解析の結果、阿哲台地に広く分布するほか、少なくとも北海道と青森・岩手・新潟・茨城各県にも産することが明らかになりつつある。

石灰岩地で確認されることが多く、冷涼で適度に保湿された石灰岩露頭の岩壁上にぶら下がって活動するほか、ガレ場の落葉や礫の間にも棲息し、ときに植物にも走上する。岡山県では今のところ真庭・新見・高梁・井原各市の石灰岩地で産出が確認され、石灰岩地であれば他にも棲息地が存在すると推測される。また、これらの標本の中にはキセルモドキと外見上区別の難しい個体も含まれており、後者としての記録の中に本種が混ざっている可能性が高い。

産地によっては高密度で多産するものの、各産地は相互に分断されて不連続であり、棲息範囲もごく狭いため、生貝の棲息総数はつねに決して多くないと考えられる。また本種はキセルモドキ属にあってとりわけ細い殻をもつため蒐集家の興味を惹き、さらに岩盤上という発見されやすい場所に棲息することから乱獲の対象となりやすい。



オカヤマコギセル

Reinia hungerfordiana okayamensis (Kuroda & M. Azuma, 1982)

(腹足綱：正腹足亜綱：異鰓下綱：真有肺大目：マイマイ目：キセルガイ
上科：キセルガイ科)

岡山県：絶滅危惧Ⅰ類

環境省：絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) 国内希少野生動植物種

展示標本：#5443 後月郡共和村〔現・井原市〕上嶋高原

大阪・京都両府と三重・和歌山・奈良・山口・大分各県に知られるカスガコギセル *Reinia hungerfordiana* (Moellendorff, 1882) の亜種。畠田和一によって1950年前後に井原市芳井町の上嶋八幡宮および妙福寺で発見された。その後、上記2産地から離れた2箇所(詳細未公表)でも個体群が発見された。現時点でこれら4地点のみで知られる岡山県固有亜種である。

本亜種を包含するカスガコギセル(広義)はいずれも樹上性で、地表から1~2 mほどの樹幹に登り、樹皮や地衣類・蘚苔類等の間に見られる。広葉樹林林縁の平坦な場所において、日当たりと風通しが良い位置に生じた古木の樹幹やその根元に限定され、薄暗く多湿な林内には見出されない。樹種はケヤキ、カエデ、イチョウ、ヒノキなど様々で広葉樹・針葉樹を問わないが生木に限られ、枯死すると本種群も消滅する。このため適切な位置に生きた巨木が残され、周囲の環境が変化しないことが個体群存続に必須で、林縁に道路や広場等が造成されたり、周囲の樹木が伐採されるなどして日当たりや湿度に変化が生じると本種群の個体群は即座に壊滅してしまう。

林縁の環境は、たとえ人為的な攪乱が伴わなくとも植生遷移によって自然と変化してゆくものであるため、本種群の棲息基盤はもともと不安定で、林縁の変化に伴って消滅と生成を繰り返し、分布範囲や個体群の規模も変えつつ、各森林の辺縁部をさまようごとく生き延びてきたと推測される。かつてはそれでも個体群の維持は可能であつたらしく多くの産地が報告されており、オカヤマコギセルも畠田和一コレクション中には実に197個体からなるロット(今回の展示標本、「黒田[徳米]氏同定品」)が現存し、当時は多産していたことがわかる。しかし近年は同様の棲息可能な場所が急激に失われることで本亜種の個体群の総数も激減したため、各産地は分断化されて孤立し、相互の交流が失われたことで深刻な絶滅の危機に陥っている。

現在、上嶋八幡宮ではごくわずかな個体数しか確認できない。対照的に妙福寺では敷地内のイチョウ樹幹や石碑・石灯籠などの表面にまとまった個体群が今なお維持されている。この個体群は現時点で全国のカスガコギセル(広義)の中でも屈指の健在産地と呼ぶこともできるが、だとしても棲息範囲はわずか20 m²以下で、絶対的な面積としては著しく狭い。総生存個体も100個体以上いるかどうか疑わしい。もう1箇所の未公表

産地では並んで立っていた 2 本の樹木のみに産していたが、そのうち 1 本が 2013 年に伐採されてしまい棲息可能範囲が一気に半減してしまった。したがって上記 3 産地全てを考え合わせても本亜種が絶滅寸前の状態にあることは疑いがない。さらにこの種群はいずれもその稀少性の極端な高さから、貝殻コレクターや標本販売業者に狙われ続けている。わずか 3 産地だけに残るオカヤマコギセルも個人による乱獲が個体群壊滅に直結する可能性が極めて高いため、現在、本亜種を含むカスガコギセル(広義)は国内希少野生動植物種に指定され、無許可での採捕や殺傷等は法的に禁じられている。



オカヤマシタラ

Parasitala sp.

(腹足綱：正腹足亜綱：異鰓下綱：真有肺大目：マイマイ目：カサマイマイ上科：シタラ科)

岡山県：情報不足

環境省：該当なし

展示標本：#2969 阿哲郡豊永村槇ノ穴〔現・新見市満奇洞〕

黒田徳米（1950）は「備中上房郡上水田村〔現・真庭市〕井殿 鍾乳洞（カネチアナ）畠田和一氏 1950年3月採集」の標本を簡素な線画で図示しつつ、「マルシタラガヒ *P. reinhardti* (Pilsbry) に比較しては螺塔の傾斜面が脹れて居ること，螺層の増大率の鈍いこと，殻質厚く色彩濃厚なことに於いて異なる。*Parasitala* (?) *kikaigashimae* (Pilsbry et



Hirase) [キカイキビ] も近似するが、螺塔低く、殻形の大きいこと、螺状脈の甚だ弱いことに於いて異なる」ことを理由に、「ヲカヤマシタラガヒ (新種) *Parasitala* (?) *okayamaensis* n. sp.」として記載しようとした。しかしその記事が掲載された『夢蛤』は全編が手書きのガリ版刷りで刊行されているため、国際動物命名規約第4版(現行版)に定める「条9. 公表したことにならないもの」の「9.1. 1930年よりも後の、なんらかの方法によって現物そっくりに複製された手書き」に該当し、したがって *Parasitala* (?) *okayamaensis* は不適格名である。その後この名は畠田(1956)などの活字文献で言及されたものの、いずれも記載文を伴わない裸名 (*nomen nudum*) であり、いまだ適格名となっていない。

畠田和一コレクションには「阿哲郡豊永村榎ノ穴[現・新見市満奇洞]」(「1950. 3. 6. 採集(黒田氏同定品)」, 今回の展示標本) および「後月郡共和村[現・井原市] 上嶋」(「黒田氏同定品」) の2ロットが含まれているものの、備中鍾乳穴産の標本は見出されていない。またそれらの標本は黒田(1950)に記されているような「殻質厚く色彩濃厚」な個体とはいがたく、むしろウスイロシタラ *Parasitala pallida* (Pilsbry, 1902) に似ているため、本当に黒田がオカヤマシタラとして新種記載しようとしていたものと同種かどうかは即断の限りでない。それ以前にそもそもオカヤマシタラなる種が独立した種として認められるか否かも不明のままである。

ただし岡山県北西部に産する *Parasitala* 属の種はいまだ検討が不十分であるため、より精査すれば真にオカヤマシタラと呼ぶべき種が見出されるかもしれず、現時点では判断を保留して情報不足とするほかない。その意味では今なお「謎の種」である。

シタラ科の一種（白色未詳種）

Euconulidae gen. & sp. indet.

（腹足綱：正腹足亜綱：異鰓下綱：真有肺大目：マイマイ目：カサマイマイ上科：シタラ科）

岡山県：情報不足

環境省：該当なし

展示標本：#4738 備中上市村〔現・新見市〕
足立

畠田和一コレクションに含まれる 3 個体（今回の展示標本）のみが現存する。3 個体とも殻の内部まで土が入り込み、殻表の光沢も失われかけているため死殻を採集したものと考えられる。岡山県ではこれに近似する他の個体は現時点で知られていない。したがって棲息状況は不明であるが、産地の足立は石灰岩地帯で、畠田はそこで様々な陸産貝類の種を採集して標本に残しており、種の多様性の高い場所であったことは疑いがない。

本種に殻が類似する白色の種群は、関東地方から沖縄県の各島まで広く分布し、それら相互にはわずかながらも殻形態の相違が認められ、各々別種と考えられる。しかし、どの産地においても著しく稀産（または採集が困難）のため、解剖や分子系統解析による個体群または種間の詳細な比較検討をなしえていない。他の地域においては石灰岩洞窟内部より死殻が確認されたり、多数の岩礫が折り重なって堆積する場所で岩を順次取り除いた果てに、最下層の礫下に棲息が確認される例が知られる。香川県高松市でシロハダベッコウと和名のみ与えられた未記載種は、剥離して薄片状となった讃岐岩（サヌカイト）などの礫が多数堆積する場所で、礫を 1 つずつ取り除いたのちに地中から現れた、湿り気を帯びた礫の裏から見出された。

本種も同様に、地表からさほど遠くない地下空間を棲息環境とする可能性が高い。その環境は一年を通じて気温や湿度などの条件がさほど変動せず、常に適度に保湿されているであろうから、近年の温暖化による過剰乾燥が地下まで影響をもたらすとすれば本種にとっても脅威となりうるであろう。ただし現時点では生貝が確認されておらず想像の域を出ないため、まずは本種の生貝を見出して系統上の位置や生態に関する基礎情報を把握する必要がある。



トサマイマイ近似種

Aegista cf. *kobensis pertenuis* (Pilsbry & Y. Hirase, 1904)

(腹足綱：正腹足亜綱：異鰓下綱：真有肺大目：マイマイ目：マイマイ上科：ナンバンマイマイ科)

岡山県：情報不足

環境省：該当なし

展示標本：#6448 [新見市]
井倉

トサマイマイは四国のほぼ全域(高知県東部を除く)に分布し，里山から山間部にかけて，広葉樹林林床の落葉下や礫の間に棲息する。これと形態的に類似する個体は山口県にも現れる。一方，岡山県ではこれまで文献記録は皆無であったが，畠田和一コレクション中に「井倉」とのみラベルに記された2個体(今回の展示標本)が現存する。これらの個体は岡山県で従来知られていた陸産貝類のどの種にも一致せず，最も似ているのがトサマイマイ(もしくは山口県に産するもの)である。しかしこれ以降岡山県では類似した個体は確認されておらず，棲息の実態に関する情報も当然ながら皆無である。産地である井倉は，岡山県北西部固有種のイクラドウゴマオカチグサが棲む井倉洞を擁する集落で，石灰岩地帯であるため，当該標本も同様の環境から得られたのかもしれないが，現時点で想像の域を出ない。未知の稀少な分類群である可能性も否定できないため，今後新たな個体や産地を見出すべく，精査が望まれる。



アワジオトメマイマイ

Aegista sp.

(腹足綱：正腹足亜綱：異鰓下綱：真有肺大目：マイマイ目：マイマイ上科：ナンバンマイマイ科)

岡山県：絶滅危惧Ⅰ類

環境省：該当なし

展示標本：#4838 児島郡琴浦町
瑜伽〔現・倉敷市児島由加〕

これまで本種の学名には *Trishoplita dacostae* var. *awajiensis* Pilsbry, 1901 が有効名として使用されてきた。しかし、*Trishoplita* オトメマイマイ属は *Aegista* オオベソマイマイ属の新参異名である。この結果、本種の属名を単純に *Aegista* に変更した瞬間、*A. awajiensis* (Gude, 1900) ジタロウマイマイの新参二次同名となるため、アワジオトメマイマイに対する *awajiensis* は無効名となり、改めて新名を設ける必要がある。また、*T. mesogonia* var. *minima* Pilsbry & Y. Hirase, 1904 を *T. awajiensis* の新参異名とする見解もあるが、このタクソンと本種の関係は明らかでない上に、もし後者が仮にアワジオトメマイマイだとしても、これもまた *A. minima* Pilsbry, 1902 マメヒロベソマイマイの新参二次同名となる。そこで、現時点ではとりあえず本種の学名を *A. sp.* とするほかない。

Trishoplita dacostae var. *awajiensis* のタイプ産地は現在の兵庫県淡路島（南あわじ市阿那賀）である。多くのオトメ



マイマイ類同様に樹上棲，半樹上棲もしくは草本棲と考えられる。岡山県では畠田（1951）が記録し，その証拠標本と見なしうる個体は畠田コレクション中に「上房郡〔現・真庭市〕水田村井殿鍾乳洞」（「黒田〔徳米〕氏同定品」，3 個体，#4833）及び今回の展示標本（「黒田氏同定品」，8 個体）の 2 ロットがある。しかし前者はマメマイマイ種群に属す小形の別種であり，少なくとも *T. awajiensis* のレクトタイプと同種ではない。一方後者の殻の形態は確かにレクトタイプに近似する。*T. awajiensis* のタイプ産地である淡路島からさほど遠からぬ位置にある岡山県には，潜在的には同種が分布していても不思議はないが，現存する畠田標本も殻以外の情報がないたため，今後改めて軟体部の内部形態の把握及び分子系統解析を実施する必要がある。

畠田標本の産地である倉敷市児島由加周辺では，近年これに似た生貝が確認されたという信頼できる情報はない。その附近は森林伐採や乾燥化が激しく，林内への廃棄物の不法投棄なども相次いでいるため，畠田が上記個体を見出した 1950 年代当時に存在していた個体群は既に消滅したか，または危機的状況にある可能性があり，改めての現況把握が必要である。

コウロマイマイ

Euhadra latispira yagurai Kuroda & Habe, 1949

(腹足綱：正腹足亜綱：異鰓下綱：真有肺大目：マイマイ目：マイマイ上科：ナンバンマイマイ科)

岡山県：情報不足

環境省：準絶滅危惧 (NT)

展示標本：#4956 英田郡西
栗倉村影石 1956 年 7 月 1
日

鳥取・岡山・兵庫 3 県の固有亜種とされる。山間や里山の広葉樹林内に見られる樹上棲の種で、人家周辺のコンクリート壁、庭、田畑の雑草群落にも見られる。ただしこれは兵庫県北部や鳥取県での観察例であり、岡山県ではそもそも本亜種の棲息の実態は曖昧である。もともと本亜種とされてきたものは兵庫・鳥取両県との県境に近い北東部の決して広くない範囲に限定され、しかもその大半はヒメコウロマイマイと考えられる。

畠田和一コレクションに本亜種として含まれている標本の大部分は、殻の形態からヒメコウロマイマイと判断される。ただし、少なくとも今回の展示標本は後種でなく本亜種の可能性がある。この 2 個体は県内の他の産地で採集された個体（すなわち後種）より際立って大きく、螺塔が低くて縫合は浅く、厚く堅牢で成長脈も粗い点で鳥取県に産するコウ



ロマイマイに酷似する。色帯は2個体とも単純な0204型で、周縁を巡る帯2は細く、臍孔周辺の帯4が占める面積も比較的狭い。恐らく岡山県の北端附近においては、コウロマイマイとヒメコウロマイマイが分布域を重ねている可能性が高い。

岡山県から北へ向かって峠を越え、鳥取県に入るとほどなく典型的なコウロマイマイが多産する地域に直面するため、岡山県にも多少とも本亜種の分布域が被っていても奇異ではないどころかむしろ自然である。ただしもちろんこれは殻のみによる推測にすぎず、遺伝解析に裏付けられた同定がなされたわけではないため、「岡山県産コウロマイマイ」が本当に実在するか否かはまだ確言できない。もし仮に真のコウロマイマイが本県にも棲息しているとしたら、それは分布域の南端に相当するため貴重であるし、棲息範囲の中心から離れた辺縁であるから低密度で寡産かもしれない、その場合は保全価値が高い集団とみなされるはずである。この仮定を実証するべくさらに詳細な分子系統解析が求められる。

ヒメコウロマイマイ

Euhadra aff. *latispira yagurai* Kuroda & Habe, 1949

(腹足綱：正腹足亜綱：異鰓下綱：真有肺大目：マイマイ目：マイマイ上科：ナンバンマイマイ科)

岡山県：絶滅危惧 II 類
環境省：該当なし

展示標本：#4954 苫田
郡奥津町〔現・鏡野町〕
箱，1951 年 10 月 2 日

未記載種。つい最近までコウロマイマイと混同されてきたが、鳥取・兵庫両県の「コウロマイマイ」の分子系統解析の結果、両者は別々のクレードに分かれ、互いに別種と判明した。現時点では岡山・兵庫両県の固有種とされ、東限は兵庫県姫路市夢前町で、同県では他にたつの市、宍粟市、佐用町で見出されている。兵庫県では標高数百～600 m 付近の山地において、主に溪流周辺などの湿度の高い環境に見られ、道沿いや川沿いの木々の幹枝や笹などの草本上で活動する。これは低地の民家の庭などにも多産するコウロマイマイの棲息状況とは大きく異なる。

岡山県でも兵庫県と同様で、県北部（奈義町、津山市、鏡野町、真庭市）の山地において溪畔林に特異的に見られる。従来岡山県でコウロマイマイと呼ばれてきたものの大半が本種に相当するとみられ、畠田和一コレクションには今回の展示標本のほか、以下の標本が含まれる：「奥津町」（「井上立」，5 個体，#4860），「苫田郡泉村〔現・鏡野町〕箱」（「井上氏ヨリ 1953. 8. 」，2 個体，#4955），「苫田郡泉村」（「黒田〔徳米〕氏同定品 1951. 9. 」，2 個体，#4970），「苫田郡富村〔現・鏡野町〕」（「黒田氏同定品 1951. 9. 」，2 個体，#4957），「苫田郡久田村〔現・鏡野町〕」（1 個体，#4965）。以上の通り，畠田標本の産地は全て現在の鏡野町内である。同町の個体はこれまで詳細な検討対象とされた例がなく，本種の現況も不明であるが，岡山県では既知産地が最も多い地域であり今後の調査が強く望まれる。

岡山県でも兵庫県と同様で、県北部（奈義町、津山市、鏡野町、真庭市）の山地において溪畔林に特異的に見られる。従来岡山県でコウロマイマイと呼ばれてきたものの大半が本種に相当するとみられ、畠田和一コレクションには今回の展示標本のほか、以下の標本が含まれる：「奥津町」（「井上立」，5 個体，#4860），「苫田郡泉村〔現・鏡野町〕箱」（「井上氏ヨリ 1953. 8. 」，2 個体，#4955），「苫田郡泉村」（「黒田〔徳米〕氏同定品 1951. 9. 」，2 個体，#4970），「苫田郡富村〔現・鏡野町〕」（「黒田氏同定品 1951. 9. 」，2 個体，#4957），「苫田郡久田村〔現・鏡野町〕」（1 個体，#4965）。以上の通り，畠田標本の産地は全て現在の鏡野町内である。同町の個体はこれまで詳細な検討対象とされた例がなく，本種の現況も不明であるが，岡山県では既知産地が最も多い地域であり今後の調査が強く望まれる。

最近では津山市奥津川などで本種に同定可能な生貝が確認されている。しかしどの産地でも密度は低く，個体数も少ない。本種は人里から離れた溪流沿いに棲むとはいえ，そうした場所も近年は砂防ダム建設などの河川改修や植林地の拡大に伴って棲息環境の破壊や悪化が進行しつつある。本種はまだ種としての実態が完全に解明されていない段階ではあるものの，狭い範囲に少数で棲息し，しかも人為的要因によって減少傾向にあることは明らかである。

